

大学における犯罪心理学の講義

—卒業研究のテーマと方法について—

The Lecture on Criminal psychology in University:
About theme and method of graduation researches.

桐生正幸*

Masayuki KIRIU

要約

本研究の目的は、大学にて犯罪心理学を専攻した学生の卒業研究を調査することである。調査内容は、研究課題と調査方法に関して行った。

結果は以下の通り。1) 多くの調査対象と主題が「非行」であった。しかし、多様な主題も見られた。2) 調査方法は、「質問紙法」であり、調査の対象は「学生」であった。

Abstract

The purpose of this study is to investigate of graduation research students majored in criminal psychology in university. The research subject and the research method were examined. The results are as follows. 1) The most common theme was “delinquency”. However, there were other themes. 2) Questionnaires were the common method used, and students were the common subjects utilized.

1 緒言

本研究は、日本の大学教育の中で大学生の受講ニーズが高いと言われている「犯罪心理学」について、より効果的な講義内容や全体的カリキュラムの構築を検討するため、今回は犯罪心理学に関する卒業研究の内容を分析するものである。

本邦の大学教育における犯罪心理学の講義内容は、概ね司法精神医学や臨床心理学に基づく犯罪者の動機や処遇に関する内容が多い。また、その内容は成人犯罪に関するものよりも少年非行について多くが講義されている。このような現状は、これまで犯罪心理学が、主に犯罪者やその行動に対し精神医学的な知見と手法を用いて研究が進められてきたことを反映する^{注1}。しかしながら、犯罪とその周辺事象に関連する心理学研究は多様化しており、これまでの講義内容では十分に対応できない。例えば、犯罪捜査の面から、犯罪者の行動が心理学を中心に統計学や地理学

* 関西国際大学人間科学部

などを加味して学際的に研究が始まっている。また、被害者への心的援助の研究や目撃者の記憶の検討など、犯罪者以外に焦点を当てた研究も盛んに行われている。そして、このような現状から、犯罪者の内面のみが現在の犯罪心理学とは定義しにくく、「犯罪者や犯罪に関与する被害者、目撃者、物理的環境などに対し、心理学の理論によって分析、検討を行う学問」と定義することが必要となってきた。当然、大学での講義内容もこの実情に見合うものに変えなければならない。

犯罪心理学研究の中で、上記定義をより反映しているものに「犯罪者プロファイリング」がある。この犯罪者プロファイリングを、大学における「犯罪心理学」の講義に取り入れることは重要と考え、桐生と古河（2008）¹⁾は、実際の犯罪捜査場面における分析手順をふまえた犯罪情報分析プログラム「大学生版犯罪情報分析教育プログラム（Education program of Criminal Information Analysis：以下、大学生版CIAと呼称する）」を開発し提案している。そして、この「大学生版CIA」を実際の講義にて使用した結果^{注2}、犯罪心理学への理解が深まったことが示唆されている（桐生、2010a）²⁾。

また桐生（2009）³⁾は、大学教育における犯罪心理学の講義では犯罪事象への直接的な接近が難しく、「犯罪現場」や「犯罪者」を扱うことが困難であることを踏まえながら、以下のような試みを行っている。まず、犯罪関連施設への訪問（裁判所での傍聴、地元の警察本部、刑務所の視察）と、関連施設（播磨社会復帰促進センター）でのインターンシップである。犯罪の生の現場を見ることは出来ないが、このような関連施設を視察すること、また受刑者との接触する機会を得ることにより、間接的ではあるが犯罪事象を実感することが可能になると考えられた。加えて、地域との協働活動（防犯活動への参加や調査）を行い、講義室では得にくい犯罪心理学関連の体験的知識の習得を図った。地域の防犯活動をより効果的に行うため、犯罪被害や犯罪不安に関するアンケート調査を実施し、その結果をふまえたフィールドワークと検討会を地域住民と企画した。これら講義室外での活動を通し、参加した学生が防犯に関する学生NPO法人を立ち上げている。学生が、防犯ソング、防犯絵本、防犯紙芝居、防犯ビデオなどの教材を作成し、地域の小学校へ出向きそれらを使用した防犯教室を行っている。また、それら調査やフィールドワークの実施結果が、卒業論文にも反映されている。

さて、犯罪心理学における効果的な講義内容や全体的カリキュラムの構築を検討する際に、最終的な学習成果である卒業研究の質的向上も重要な検討事項となろう。これまで犯罪心理学に関連する分野では、地域看護学領域における卒業研究の動向の報告（栗本・金山、2009）⁴⁾、社会心理学領域における卒業研究の分析（高木ら、2011）⁵⁾などが報告されているが、犯罪心理学を直接的に取り扱った卒業論文の詳細分析は報告されていない。今回、分析を試みることにより、犯罪心理学の効果的な講義内容や全体的カリキュラムの構築を検討するための重要な資料となり、また、犯罪心理学による卒業研究指導の一指針になるものと考え。そこで今回、前述した講義の試みや実践を行った5年間にて著者が指導した卒業研究の内容を分析し、今後の検討や研究のための資料を提供してみたい。なお、今回は著者が指導した卒業論文のみを分析対象としているが、同専攻の教員指導の卒業論文も現在、蓄積されているので、それらを含めた分析は今後の課題としたい。

2 目的

犯罪心理学を専門とする教員のゼミナールに入り指導を受けた学生の卒業論文の主題と方法を分析し、これからの犯罪心理学の卒業研究の可能性を検討する。

3 方法

3.1 分析資料

K大学にて、犯罪心理学を専門とする著者が卒業研究を指導した2006年度卒業生13名、2007年度卒業生9名、2008年度卒業生19名、2009年度卒業生8名、2010年度卒業生7名、計56名（女性23名、男性33名）の卒業論文を分析資料とした^{注3}。なお、各卒業論文のタイトルは末尾付録の通りである。

3.2 手続き

各卒業論文のテーマや研究方法を、暫定的に項目立てし、著者一名により分類、単純集計した。各分析項目は、表1の通りである。

表1 卒業論文の分析のための暫定的な項目

<ul style="list-style-type: none"> ・作成年度 ・作成者 ・性別 ・タイトル名 ・研究主題 ・研究方法（実験法，質問紙法，面接法，フィールドワーク，観察法，事例研究，その他） ・研究対象（学生，会社員，専門家，住民，PTA など人的対象。公表データ，創作物，物理的環境，文献など非人的対象） ・研究概要 ・調査対象数（人数） 	など
---	----

4 結果と考察

まず、研究主題の分析結果である（表2，表3）。

表2 犯罪事象に関する研究主題について

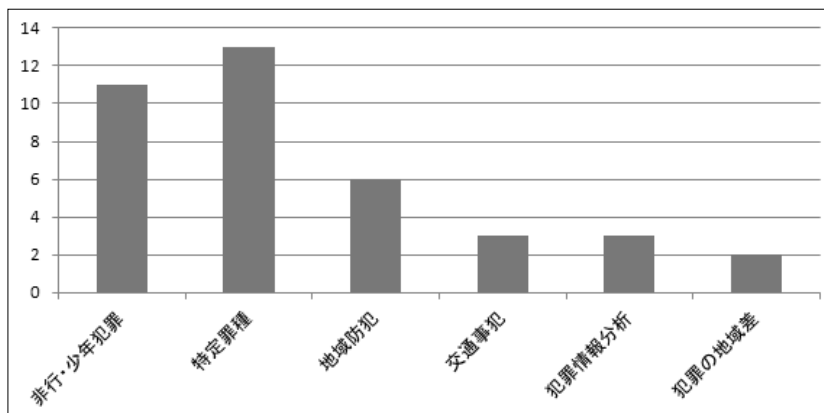
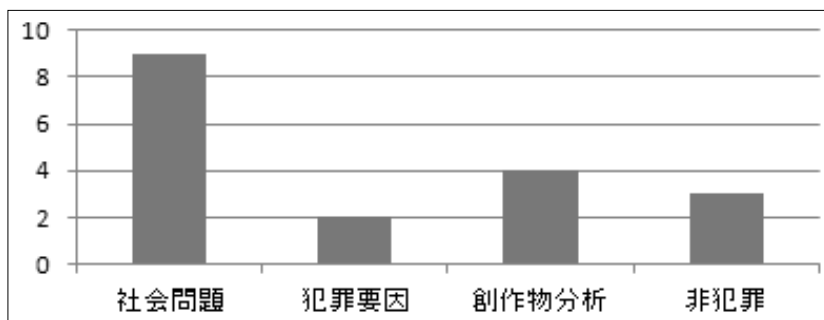


表3 犯罪事象周辺に関する研究主題について



特定罪種に関する研究など犯罪事象に関する研究主題と、その周辺に関する研究主題が見られた。

主な主題を見てみると、次のような内訳となっていた。

最も多かった「特定罪種」の内訳は、薬物事犯が4題、サイバー犯罪が2題、海上犯罪が2題であり、振り込め詐欺、性的犯罪、器物損壊、ひったくりなど1題ずつであった。

「地域防犯」の内訳は、犯罪不安感が5題、環境要因の分析が1題であった。

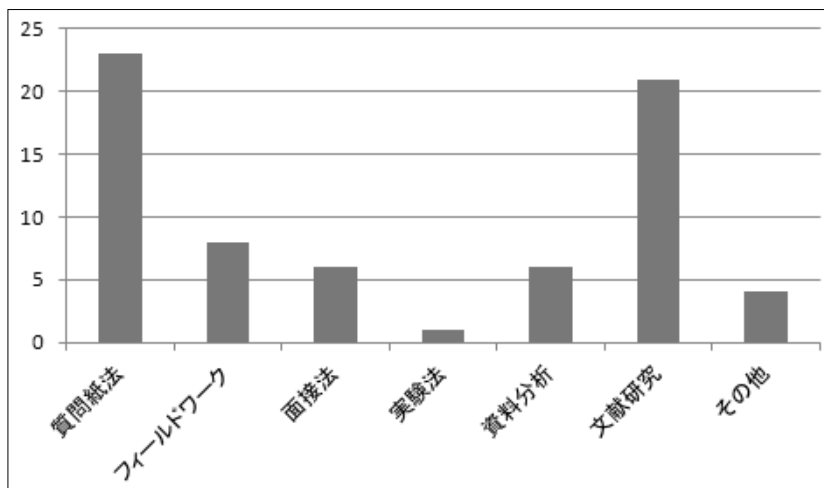
「社会問題」の内訳は、刑務所が抱える問題が3題、報道被害について1題、ファンの逸脱行動について1題などであった。

「創作物分析」の内訳は、まんがにおける暴力行為の分析が2題、特定作家の小説の内容とその当時の犯罪特質との比較が1題、テレビの刑事ドラマの変遷と同時代の事件との関連が1題であった。

なお、「非犯罪」は、犯罪とは関連のない研究主題による卒業論文である。

次に、研究方法についての結果である。表4に、各研究方法の頻度を示した。2つ以上の方法を併用したのもあったので、総数は69題となっている。

表4 研究方法について



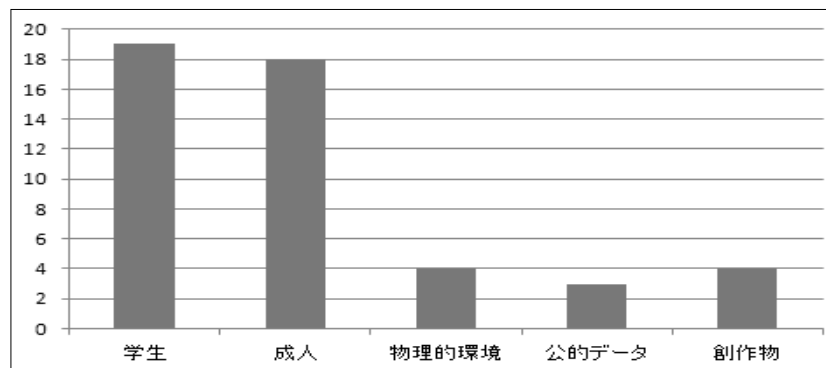
最も多いのが「質問紙法」であった。この質問紙法における研究での回答協力者は、概ね100名程度であったが、指導教員による研究プロジェクトのデータを使用した研究では、800名台が1題、1000名を超えるものが2題あった。主題としては、「非行・少年犯罪」が8題、「犯罪不安」が3題であった。結果の分析において、t-検定といった有意差検定などの統計的処理が行われている。

次に多かった「文献研究」は、テーマを絞り複数の文献を読みまとめるものである。この方法では、「薬物事犯」や「刑務所が抱える問題点」などが主題であったが、質問紙法や面接法などを併用して行ったものも少なくなかった。

「フィールドワーク」は、「地域防犯」や「交通事犯」を主題にする研究が多かった。また、海外（韓国・釜山、アメリカ・シアトル）での観察もあった。観察結果は、 χ^2 検定などの有意差検定の統計的処理が行われている。

次に、分析データの対象者（物）である。表5に示した題数は、「文献研究」のみの卒業研究を除いた47題である。

表5 分析データの対象者（物）について



最も多かった「学生」は、大学生が15名、高校生が4名であった。なお、「学生」における研究方法としては、「質問紙法」が多かった。

「成人」は、地域住民が4名、刑務所職員やパチンコ店職員などの職業専門者が6名などであった。なお、「成人」における研究方法としては、「面接法」の使用も多かった。

以上、犯罪心理学を専門とする教員のゼミナールに入り指導を受けた学生の卒業論文の主題と方法を分析した。その結果、主題は「非行・少年犯罪」、「特定罪種」が多かったが、それ以外の多様な主題も見られた。研究方法は「質問紙法」が多く、「学生」を調査対象とするものが多かった。

犯罪事象に関する学部生の身近な問題として、また、調査対象として容易にデータ収集が可能であることから「非行・少年犯罪」に関する卒業研究が多かったものと考えられる。次に、様々な罪種に関する研究主題が多かったが、特異な犯罪事例の検討は1題しかなく、身近な犯罪に関する主題がほとんどであった。また、臨床心理学的な手法による事例研究は見られず、調査紙法が主に行われていた。日本においては、学生はむろん、大学研究者ですら直接的に犯罪者には面接できない現状からみても、事例研究が少ないことは了解できよう。しかしながら、犯罪者の行動や、犯罪事象を取り巻く環境要因も犯罪心理学研究の範疇に入ることを見れば、事例研究に

偏重せずとも、十分に研究が出来ることを示すものとも考えられる。

以上より、本研究の結果を一資料とし、これからの犯罪心理学の卒業研究の可能性を、今後十分に検討していきたい。

【付 録】

分析に使用した卒業論文の全タイトルを下記に示す。

1	交通事故に関する道路環境の検討
2	犯罪不安と防犯～子どもを取り巻く環境～
3	島の犯罪について～橋がかかることによる犯罪の変化～
4	動物と人間の関連性～動物虐待の実態～
5	性犯罪における一男女間の認識の違い
6	児童虐待の発生要因における検討
7	地方における犯罪の都市化
8	薬物(マリファナ)の実態とその認識について
9	戦争と犯罪に対する認識の検討
10	社会環境が少年非行に与える影響-マスメディア・学校・家庭の要因について
11	地域・家庭が少年非行にもたらす影響
12	海の犯罪について
13	現代に至るまでの少年犯罪の傾向-過去6年間の少年犯罪
14	覚せい剤やマリファナに対する意識について
15	少年犯罪の傾向と少年犯罪に対する意識調査
16	青少年による薬物やタバコの危険認知について
17	青年における薬物への認識
18	振り込み詐欺に対する現実と認識の違い
19	道路交通における運転者の速度意識について
20	万引きに対する意識調査
21	女性における犯罪不安感の研究
22	学生の攻撃性と社会的促進-:漫画雑誌を分析して
23	現代学生のストレス
24	ストレスが犯罪発生に及ぼす影響
25	犯罪不安感における地域差の違いについて:沖縄県と兵庫県と比較
26	青少年の犯罪意識
27	交通事故と道路環境の因果関係
28	身近な金融犯罪の日韓比較:サイバー犯罪から派生する金融犯罪
29	安全な街に向けて:大阪市のひたたくりに関するフィールド調査
30	家庭から生まれる非行少年
31	インターネットの歴史と現在:それにかかわる犯罪の傾向と対策
32	報道被害:マスメディアを通じた報道が及ぼす社会への影響
33	更生施設としての刑務所の盲点
34	変わりゆく刑務所:受刑者の異変
35	刑事ドラマの内容の変遷と犯罪における相互影響の検討
36	やおいと犯罪事情の関係性
37	犯罪と環境要因との関連:発生場所と不安場所
38	若者の逸脱行動を引き起こす要因に関する研究
39	犯罪リスク認知と性別・年齢の関連性
40	犯罪行為とテロ行為
41	変わりゆく刑務所:PFI刑務所システムの検討
42	非行傾向の小学生に関する教員の認識
43	割れ窓理論に関するフィールド調査-ゴミと犯罪発生は関連するの
44	犯罪に関するイメージについて
45	海の犯罪
46	物流業界におけるリスクマネジメント
47	笑いについて-心理学的見地からの分析
48	自傷行為と自殺の検討～なぜ自分の身体を傷つけるのか～
49	購買行動に関する研究:人はなぜ買っても使わないのか
50	受刑者の社会復帰の現状と取り組み
51	ファン集団の逸脱行動-ジャニーズのコンサートなどにおけるフィールドワーク
52	犯罪が及ぼす共感性の影響-10罪種の犯行予測について-
53	ギャンブル依存の検討:パチンコ店における聞き取り調査について
54	東野圭吾の小説における犯罪の傾向と分析
55	秋葉原無差別殺傷事件における意識調査
56	犯人像イメージと実際の犯人との比較

脚 注

注1 現在の日本の「犯罪心理学」の主たる研究分野は「非行臨床心理学」であり、また主たる方法論は犯罪関連事項の質問による「社会心理学」であると推定される。このことは、本日本犯罪心理学会の学会員構成や、学会大会の発表内容が、もっぱら「非行」「少年」を対象とする事例的報告と、調査紙法を用いた研究によるものであるところからもうかがえる。そして、それは大学の講義内容に反映されていると考えられる。担当教員の専門は、①社会心理学の領域、②精神医学・臨床心理学の領域、③社会学や法学の隣接領域、④法心理学の領域に大別でき、その講義を支える個人的経験は、①矯正施設での経験、②精神鑑定の経験、③諸外国の司法機関での経験、④裁判所での経験、⑤犯罪捜査での経験となる。これら専門と経験をもつ教員は、他との総合的な関連性を未検討のままにし、「犯罪心理学」の講義が行われている。また、犯罪事象を構成する要因は、加害者の異常性ばかりにもとめられるものではない。実際の犯罪心理学は、被害者の問題（心のケア、犯罪の誘因など）、監視者・傍観者や目撃者の問題、物理的な環境要因の問題（防犯など）といった、犯罪事象の各構成要素にも積極的にアプローチしている。しかしながら、現在の日本の「犯罪心理学」の講義は、対象とすべき事象を全てバランス良く捉えているとは、たぶん言い難い。

注2 桐生（2010b）⁶⁾は、「大学生版犯罪情報分析プログラム」により、近畿地方にて発生したプロテスタント系教会消火器投げ込み事件（2008年9月以降70件以上発生）について、講義時に大学生に分析させている。

対象学生は、K大学3年生、開講科目「犯罪学特論I」（犯罪者プロファイリングに関する科目）受講生49名である。彼らは1年生時に犯罪学概論を、2年生時に犯罪心理学、非行心理学、刑法などの基礎法論を学んでいる。この科目のシラバスは次の通りである。「1～7回」：犯罪者プロファイリングの理論、手法や事例。「8回」：中間テスト（該当事件の新聞記事を読み小論文作成を含む）。「9回」：事件資料を持参し個人分析。「10回」：グループ討議。「11回」：パワーポイントによるグループ発表。9回の課題・事件に関する新聞記事、分析に必要な基礎資料などから、犯人像、動機、次の犯行、防犯対策を分析すること。その分析結果の根拠を明示すること、など。グループ討議後、結果を発表させた。

彼らは8グループに分かれ分析した。主なグループ討議の分析結果は、次表のとおりである。単純集計による傾向分析、過去の事例との比較による分析、プロテスタント系教会や消火器が持つ意味の分析など多様な報告となった。なお、2010.7.4、大阪にて逮捕された容疑者は、大阪在住の男性（無職、29歳）であった。各グループが収集した資料とそれに基づく分析に、ばらつきが見られたが、その後の連続放火分析において、その傾向は小さくなっている。個人分析後にグループ検討・発表し、他グループとの差異を知ることの教育的効果は高いものと考察された。

表 大学生版犯罪情報分析プログラムによる連続放火の分析結果について

No.	性	年齢	職業	動機・性格	生活	共犯	次の犯行	主な分析
1				外国人		有り		プロテスタント系教会の分布地図
2				怨恨・思想			兵庫県内	投げ込み事例、近畿の信者数
3	男	20-40	有職	警戒心強		無し	南下する	犯行地をマッピング
4	男	20-30	有職	挑戦心強	一人暮らし	無し		犯行場所の環境要因分析
5	男	30代		神経症	未婚		大阪市北区	犯行曜日の分析
6	男	20-40		愉快犯			神戸市内	
7	男	20-40			大阪県境	無し	大阪府内	消火器の投げ方、意味の検討
8	男	20-30	有職		既婚	有り		連続器物損壊事件事例

注3 分析対象の5年間にて、研究指導を行い論文の一部は完成しているシニア学生の研究1編と、犯罪心理学コースの修士課程の修士論文5編は分析に入れていない。なお、シニア学生の研究テーマは「裁判員裁判に関する多角的分析」であり、院生の修論テーマは「地域防犯と犯罪不安感」が3編、「犯罪事象への共感性の分析」及び「犯罪に対する原因帰属」についてである。これら研究は、関連するいくつかの学会にてポスター発表を行い、また「犯罪に対する原因帰属」については査読論文として「犯罪心理学研究」に掲載されている。

【参考文献】

- 1) 桐生正幸, 古河逞箭:「大学生における犯罪者プロファイリングをテーマとした犯罪心理学の講義」,『関西国際大学研究紀要』, 9,2008,77-87頁.
- 2) 桐生正幸:「大学における犯罪者プロファイリングの講義の検討」,『関西国際大学研究紀要』, 11, 2010a, 99-112頁.
- 3) 桐生正幸:「大学における「犯罪心理学」の教育方法について」,『日本心理学会第73回大会発表論文集』, 2009, 469頁.
- 4) 栗本 一美, 金山 時恵:「地域看護学領域における「卒業研究」の動向 -- 過去9年間の看護研究集録集の分析より」,『インターナショナル nursing care research』8 (2) , 2009, 79-87頁.
- 5) 高木 修, 田中 優, 小城 英子, 大田仁, 阿部晋吾, 牛田好美:「学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷 -- 卒業研究のテーマ分析 (特集 対人社会心理学研究 -- 援助行動研究を中心として)」,『関西大学社会学部紀要』2 (2) ,2011, 131-153頁.
- 6) 桐生正幸:「大学における犯罪者プロファイリングの教育」,『日本法科学技術学会誌』15, 2010b, 133頁.